

平成28年度大仙市仙北地域の未来を語る会報告書

1. 日時：平成28年11月23日（水） 14：30～17：55

2. 会場：グリーンパレス竹馬

3. 出席委員（10名）

伊藤 良子	伊藤 まり子	大釜 滝浩	大河 奈々子
後藤 孝子	齋藤 勇一	佐々木 誠孝	佐藤 隆造
原 隆新	吉田 利雄		

4. 来賓（5名）

大仙市副市長	老松 博行	大仙市議会議員	大山 利吉
大仙市議会議員	本間 輝男	池田家16代当主	池田 泰久

5. 大仙市仙北地域市民・大仙市職員（63名）

6. 内容

- 14：30 開会（総合司会：伊藤まり子副会長）
- 14：31 主催者あいさつ（吉田利雄会長）
- 14：34 来賓あいさつ（老松副市長・本間輝男議員）
- 14：40 来賓紹介（大山利吉議員、池田泰久氏）
- 14：45 第1部「がんばる集落応援事業活用事例発表」
- ①事業説明：まちづくり課
 - ②事例発表：板見内東部地区連合会
弘田柵真会
板見内三吉会
 - ③集落支援員活動発表：藤原正美支援員、鈴木由美子支援員
- 16：05 グループ別意見交換
- ・3つのテーマを設定し、1テーマを3つのグループが話し合い、全部で9グループに分かれて意見交換を行った。
- 17：05 グループ別意見交換の報告、全体での意見交換
- ・1グループごとに発表し、最後に来賓、集落支援員、主催者からの意見発表とまとめを行った。
- 18：05 第2部情報交換会（懇親会・食事会）

7. 事例発表の要点

(1) 板見内東部地区連合会

①団体の概要

- ・同会は、寺村・本郷・善丁防の3集落で事業を実施した。
- ・仙北地域の東に位置する地区であり、120世帯、人口454人、65歳以上は153人で高齢化率33.7%である。
- ・地域で様々な事業を行う際は、話し合いが非常に重要になり、みんなが同じ気持ちで事業に向かうことで、よりスムーズに、そして楽しくできる。
- ・平成25年度の「がんばる集落」活性化支援事業の申請について3月から役員会を行い、各集落で相談をしていただき5月には申請にこぎ着けた。
- ・当連合会の活動拠点は、3集落それぞれに集落会館があり、それぞれの集落持ち回りでの開催も検討したが、様々な準備が必要であることや、多くの来場者が予想されることから、3集落の中心でもあり、比較的規模が大きい、農村公園が併設されている本郷構造改善センターとした。

②実施事業内容

- ・板見内東部地区活性化事業は、大きく2つの事業を行っている。
- ・一つ目は「夏祭り」で、農村公園を会場に、昔行っていた夏祭りを復活すること、合わせて子どもから高齢者まで幅広い世代が交流する機会を作り出すことを第一の目標として行った。
- ・以前は近くの神社で夏祭りがあり、大人達の演芸はもちろん、子ども達の楽器の演奏などを行っていたが、次第に数年に1回という形で開催されるようになり、近年はまったく開催されていない状況となっていた。
- ・お祭りが一番大事なことでないが、楽しむ場があれば様々な交流が生まれる機会になると考えて計画した。
- ・平成25年度から開催し、今回で4回目となる。祭り当日は、天気も良く、予定通り農村公園にて会場設営からスタートし、トラックの荷台を舞台にし、屋根はブルーシートで覆い、手作り感満載の会場である。
- ・仙北支所からイス・テーブルなどを借り、たくさんのお客さんを迎えられる会場がセットできた。
- ・今年は、初めて子ども達用のゲームを用意したところ、お祭りが始まる前から子ども達が集まり楽しんでた。
- ・集落のみんなが楽しみにしており、まだ明るいうちからお客さんが集まり出し、毎年150名ほどの参加者となる。

- ・二つ目は「冬祭り」で、「天筆」を主体に行っている。本郷集落では、数年前から集落会と子供会の合同で開催していたが、これを機会に3集落による交流と伝統文化の継承も含め拡充をねらった。
- ・祭りの主役を子ども達とすることで、家族の皆さんが集まり、大きな交流が生まれる。子ども達は各家庭を回り、しめ飾りなどを回収し、高齢者をはじめとする大人は、現場の設営を行う。
- ・天筆はわらを使っての作業となり、高齢者ならではの技術が発揮される。
- ・本番開始時に、道路脇に雪で制作したミニかまくらに火を灯し、幻想的な風景を醸し出している。
- ・3集落の子ども達が集まり、家内安全・交通安全などの願いをこめて短冊を燃やし、テント内にはたくさんの親子が集まり、交流が深まった。

③購入した物品について

- ・大きな物品は、音響装置、テント3張り、ピクニックテーブル、発電機など。
- ・イベントの開催となると音響が大活躍で、カラオケはもちろん、音を鳴らすことで人を呼び込む効果もある。
- ・昔のお祭りだと地面にシートを敷いたり、立ったままだったりということがあったが、ピクニックテーブルがあることにより高齢者も楽な姿勢で参加できるということで重宝している。
- ・発電機は災害時にも活用できる重要なものとする。

(2) 払田柵真会

①団体の概要

- ・本会は、払田地区の3集落（上払田・中払田・下払田）の20～50歳の約40人が中心となる団体で、地域の象徴である払田柵跡、払田真山を守り受け継ぐことをその名称に反映させている。
- ・3集落や世代の垣根を越え、往年の思い出や新しい企画を地域住民で共有し、交流を深める機会となる事業の取り組みを目指して発足した。
- ・払田地区は、地域資源が豊富な地区であり、178世帯、人口605人、65歳以上は193人で高齢化率32%となっている。
- ・払田地区には、3集落とともにその連合組織である払田連合会があり、本会の活動に理解いただき、運営費や人的な支援等全面的な協力を得た形で活動を行うために話し合いを行ってきた。

②実施事業内容

- 一つ目は「冬まつり」で、3集落で以前はそれぞれ行われていた「天筆」を毎年払田柵跡で行われている「払田柵の冬まつり」に合わせて合同で実施した。
- 出店や他地域の小正月行事を呼び込むなどの企画をし、家族全員が参加できるような交流の場を創出したいと考えた。
- 昨年秋に、天筆に使う藁集めを行ったが、その際に払田連合会、各自治会や子ども会などたくさんの方々から協力をいただいた。
- 冬まつり当日は、あいにくの雨だったが、100名以上の来場者があり、豚汁、玉こん、焼き鳥、甘酒など、柵真会だけではなく、各自治会からも持ち寄りであるまいを行っていただいた。子どもたち向けには、お菓子や餅まきを行い、大いに盛り上がった。
- 天筆への点火の際には、大人が火をつけ、子どもが消すといった昔ながらのやりとりも行われて昔のようになぎやかな天筆になり、大成功だった。

- 二つ目は、「鍾馗様の復活」で、以前真山の山道に集落の守り神として飾られていた鍾馗様を「仙北史談会」や払田地域老人クラブなどから協力いただいて、復活させるとともに、その伝統技術や由来を引き継ぎ、若い世代に継承していきたいと考えた。
- 製作は、わら集めからはじまり、作業はおよそ月2回のペースでビニールハウスの中で行った。
- 製作にあたっては、仙北史談会の黒澤さんや長澤さんにご指導をいただきながら、少しずつ進めていったが、私たちが経験したことない「わらのすべ取り」や「縄ない」、「こもづくり」など、父親からも教えてもらったことがないことを教えていただいた。昔の農業やわらの大切さを学び、楽しみながらわらいじりをして若い世代が経験できなかったことをさせていただき、無事完成させることができた。
- 完成した鍾馗様は、3月20日に真山山道脇に設置し、その際には地域住民の皆様からのご協力いただき、途絶えつつあった地域の伝統を我々の代で復活させ、引き継ぐことができたと感じている。
- 以前は何年間に1体作っていたようだが、史談会の皆さんから教えていただけるうちに技術を習得するため毎年取り組んでいき、自分の子どもたちなど若い世代にも伝えていきたいと考えている。

③購入した物品について

- ・わら取り用のバインダー、イベント用テント、椅子、調理器具、ドリンクストッカー、払田地区のアルバム作りや情報作成用のプリンタやスキャナーを購入した。

④各種イベントでの出店

- ・旧池田氏庭園払田分家でのライトアップの際に出店し、だまこ汁などを販売し、初日で100食が完売するといった状況で大盛況に終わった。年々、来場者も増えているようで、払田地域を盛り上げる良いイベントだと感じているので、これからも参加し、盛り上げていきたい。
- ・十数年ぶりに復活した真山公園観桜会でも、出店してだまこ汁や焼き鳥など販売したほか、子どもたち向けの型抜きゲームなども行い、自分たちが小さい頃経験したことを今の子どもたちに体験させることができた。
- ・イベント日の夜間に高梨神社の山道両脇に竹灯籠を設置し、神社のライトアップに合わせて、明かりを灯し、幻想的な景色を作り出して来場者に喜ばれた。材料の竹は、市内の住民の方から提供いただいたもので、その方の家に行き行って切らせていただき、自分たちで作り上げた竹灯籠だったので、すべてに明かりをつけたときはとても感動した。これも続けていきたい。

⑤今後の展望・活動について

- ・本会は、払田地区にある地域資源を守り、受け継ぎ、共有し、世代の垣根を越えた地域交流を深める機会となる事業の取り組みを目的としている。
- ・今後は、当会の活動を継続・発展させることにより、仙北地域全体の地域交流及び活性化につなげることができるような機会となる事業への取り組みを目指していきたいと考えている。
- ・高梨神社100周年の際に、柵真会として出店させていただいた。神社の建物、彫り物など、非常に貴重な存在であることを改めて気づかされた。柵真会の活動として、神社の周知や活動への協力も行っていきたい。払田柵真会には、会の壁はないのでみんなで地域を盛り上げていければと考えている。

(3) 板見内三吉会

①団体の概要

- ・県道千畑大曲線に沿って、刈又自治会、弥兵衛谷地自治会、一ツ森自治会が位置していて、3集落合わせて67世帯ある。
- ・本会は、当地区で昔行っていたお祭りを復活させようと結成された団体である。

②実施事業内容

- ・当地区には、温泉施設「柵の湯」があり、十分な駐車スペースやステージ付きの中庭など、祭りにはちょうど良い施設であることから、会場としての使用をお願いしたところ、快く了解いただいた。
- ・祭りを行う上でその内容を決める企画会議が非常に重要であるが、それをスムーズに行うために、誰もが参加できるグラウンドゴルフ大会を祭りの前と後に開催している。
- ・グラウンドゴルフに関するエピソードとして、20年位前に家族でグラウンドゴルフをしに行った時、突然父親がやらないと言い出し、プレーせず、ただ一緒に回るようになった。しかし、我々がプレーしている様子が面白かったようで、途中から自分もやりたいと言い出し、そこから結局24ホールまで終えたことがあった。いつも夕飯の時には、おかずの味が濃いか薄いかの話しか出ないところ、この日はグラウンドゴルフのプレイの話題で家族全員が大いに盛り上がり、グラウンドゴルフの良さを改めて認識した。
- ・家族の親睦も深まるのであれば、集落の親睦も深まると考えて、夏祭りの前後に開催している。もちろん大会の後の懇親会も重要で大いに盛り上がっている。
- ・当地区の夏祭りは、毎年8月第1土曜日と決めており、地域住民も認識している。
- ・祭りの際に来場者が快適に過ごせるよう、祭り前日には、近くにある一ツ森において、蚊や蜂などの害虫駆除を行っている。
- ・地域の子どもたちや来場者皆さんに喜んでいただくため、当地区にある餅の館の名人たちをお願いして餅つきをして餅の振る舞いを行っている。
- ・祭りのオープニングには、藤原集落支援員からの紹介で「神宮寺キャンディーズ」という小学生の団体からよさこいを披露していただいている。
- ・地域のマスコットキャラクター柵磨呂くんにも参加してもらっている。
- ・祭りに欠かせない出店は、さまざまなメニューを準備して好評であり、特に焼き鳥は1,500本くらい焼いて完売となっている。また、ステージイベントを行う上で司会と音響の方々には大変難儀をかけており、大いに盛り上げていただいている。
- ・企画会議において、夏祭りなんだから盆踊りをしたらとの意見があり、では仙北地域にある仙北音頭を踊ろうということになったが、誰も踊れる人がいない状況であった。そこで踊りの師匠をお願いし、手本となって参加いただき、来場者が輪になって、身振り手振りだまねて覚えながら踊った。来年以降もずっと続けていきたい。
- ・午後5時頃から、主催者のあいさつを皮切りにステージでのイベントを開始。

- ・ステージプログラムについては、地域内で出演者の募集を行うが、なかなか集まらず、最終的にはスタッフが自ら出演し、会場を沸かせている。
- ・演芸の部で目玉となったのが、去年は弘田出身のプロ歌手「鏡元もとじ」さんの歌の披露であった。ステージから降りて客席とのコミュニケーションなど、さすがプロだと感じた。
- ・今年は、秋田市からあるまんど山平さんをお招きし、秋田大学の生徒と一緒にフォルクローレの演奏をしていただいた。また、お祭りを盛り上げるためには、来賓の方々からも出演いただき披露していただいている。
- ・イベントの最後には、大抽選会を行い、柵の湯からは宿泊券と入浴無料券、地元商店からは自転車を提供いただくなど、たくさん協力をいただいている。この場をお借りしてぜひ来年もよろしく願います。
- ・お祭りのあと、熱が冷めないうちに柵の湯で大反省会を行っている。毎年続けていくために重要なことであり、昔の人がよく言った「酒飲んで物事決まる」はやっぱりそのとおりだと思う。1年目、2年目大盛況で終えることができたのは、地域の方々のご協力はもちろんですが、本日参加している集落支援員の藤原さん、鈴木さんのおかげだと感じている。ぜひ来年もよろしく願います。

8. 集落支援員の活動発表

①集落支援員とは

- ・大仙市内に住んでいる人でありながら他の地域に入り、集落との合意の下、外からの目線で集落の現況調査や集落内の点検、それから話し合いの場づくりなどのお手伝いをしている。
- ・大仙市内に4名配置されているが、仙北地域には私たち二人が配置されている。

②具体的な活動事例（鈴木由美子支援員）

- ・支援員になる前の話であるが、協和地域で30年前に途絶えていた梵天を復活できないかという話があがっていたが、簡単にできることではないと流していた。しかし、あまりに何度も話になることから主人と相談して、集落には自分の子一人だし、この子のためにも復活させようということになった。
- ・ちょうどその時に、がんばる集落活性化支援事業応募団体募集の記事が広報に載って、自分たちが考えていることに当てはまる事業だと思い、手を挙げた。
- ・応募、申請、審査会、あれよあれよという間に梵天が復活した。この時に手伝ってくれたのが、今隣にいる藤原支援員ほか、3名の支援員の方々だった。

- ・梵天作りの相談に乗ってもらったり、手伝ってもらったり、事業を行っていく上で本当に心強い存在だった。見ず知らずの私たちのために親身になって話を聞いてくれ、的確なアドバイスをくれ、祭りのときは一緒に集落を廻ってくれる、こんな仕事もあるんだな、と素直に感動した。
- ・自分もこの人たちのように人の役に立てたらと思って、支援員をやることに手を挙げた。
- ・でも簡単にできるものではなく、まずは集落に入っているいろいろな話を聞かせてもらう。その中でその地域にある人や資源をちょっと使わせていただいて、煮詰まった時に背中を押したり、もめた時はサンドバックやクッション役をしたり、基本的には集落の方に寄り添って、いろんな話を聞いて熱い気持ちを受け止める。
- ・また、時々良いアドバイスをして感謝されたり、行事や祭りの人手が足りないところを手伝ったりと、集落のいつものメンバーにちょっと違う顔が見えるだけで話が弾んだり会話のきっかけになったりするのではないかと考えている。

③具体的な活動事例（藤原正美支援員）

- ・集落支援員が集落に入っていくパターンが二つある。一つは、集落において取り組みたい事業などが既に決まっていて、そこへ私たちが加わり、アドバイスをしたり、行政や関係機関とのパイプ役として調整を行いながら事業を進めるパターンである。
- ・二つ目は、行政の担当者や集落の役員の方々と事前に協議し、住民全員を対象にした座談会を開催して、集落の課題等がある程度把握するパターンであり、どちらもその後アンケートや聞き取りを行い、その結果を集落で共有できる場を作って少しずつ活動に結び付けていく。
- ・秋田大学の学生も一緒に活動してくれたこともあり、私たちとは違った視点での関わりが持てるなど、多方面から集落を見ていった事例もある。
- ・集落の座談会や協議の場において、以前は参加者のほとんどが男性であり、女性はお茶を入れてくれるといった役割であったが、最近は事業の内容にもよるが、女性の参加者が非常に多い。
- ・県の会議等に出てくる事例でも、女性が元気に活躍している集落は非常に明るく活性化しているイメージがもてる。
- ・大仙市次世代地域リーダー育成セミナーの中で、「集落へのかかわりは、父母がやっているから、まだまだだと思っていたが、セミナーに参加して今から関わっていく必要があると感じた」という意見があった。
- ・世代間のバトンタッチについては、いつということではなく川の流れのように受け継がれていく必要がある。

- ・大仙市では、今年の夏から小学3年～中学2年までを対象に「大仙ふるさと博士育成事業」を行っていて、市内のお祭り、施設見学、体験などに参加することでポイントが付与されて、そのポイントによってさまざまな階級の称号が与えられ、博士を目指すというものである。
- ・大人にとっては、旧市町村の枠組みがあるかもしれないが、今の子どもたちにとっては大仙市がふるさとであり、市全体を資源と捉えている。
- ・板見内三吉会のイベントにも、他地域から多くの子供たちが参加して、祭りを大変盛り上げてくれている。
- ・事業あるなしに関わらず、人が集まる機会が活性化につながる第一歩と考えている。これからも何か話し合いをするというときには、ぜひ集落支援員に声をかけていただければありがたいので願います。

9. グループワーク発表

【①～③のグループ】 世代間交流事業の提案

①グループ

- ・横堀地区全体の運動会を復活させたい。
- ・昔ながらの手作業や暮らしの知恵を学ぶ交流会などを行う。
- ・地域を見直すかるた大会を行う。かるたは、地域の先人、名勝、賢人、事業等に関したことを歌にし、「かるた」として子ども達に楽しんでもらう。
- ・これによって、地域を見直す一助になると考えることから、集まって話し合う機会を作る必要があり、女性や子どもの参加が不可欠であると考えます。

②グループ

- ・問題点として、同世代であれば集まりやすいが、幅広い多世代になると話し合う時間が持てない。理由としては、若い世代は共働き、子どもが集まりにくい。
- ・目指す方向としては、「何か一つのことをみんなで行う」「見るだけでなく参加できるものがある」「一つの目標を達成し、懇親会等を行う」としている。
- ・これに向かうためにできることとして「子どもも大人も参加できる研修会の開催」「集落支援員に話し合いに参加してもらい助言をもらう」などがあつた。
- ・具体的にできることとして、一つ目は「祭り」である。先着順に何か特典をつけたり、最後に抽選会を行うなど最後まで参加できる仕組みを作る。
- ・子どもが楽しめるメニューを行う。

- ・もう一つは運動会を行う。この他には、風船バレー、芸能発表、仙北小唄をみんなで踊るなどがあった。
- ・結論としては、子どもも大人も楽しめるイベントを行う。

③グループ

- ・三つの昔に関する事業を考えてみた。
- ・一つ目は、昔遊び、遊具を作る機会を設けて、世代間の交流を深める。
- ・二つ目は、昔行われていた行事を遡って教える。
- ・三つ目は、昔の食べ物（菓子類）を作ってみる。
- ・ただし、リーダー、参加者の確保については課題として残っている。

【④～⑥のグループ】 集落間連携事業の提案

④グループ

- ・昔は、集落連携など必要がないくらい人がいたが、現在は子どもも少なく、高齢化の問題もあり、集落をまとめていかなければいけない状況にある。
- ・しかしながら、昔の集落の単位である「支部」ごとの溝が深く、急にまとめて祭りなんかはできないとの意見があった。
- ・その中で問題となっている「子どもがいない」という点では、子どもがいる場所「PTA」と「地域」がもっと交流を持つ必要がある。
- ・例えば、地域で子ども達に雪寄せ体験をさせたり、子どもたちと集落の女性たちで花壇をつくるなど。また、地域の農家にて、「ブルーベリー農家での摘み取り体験」など、こういった交流を持つことで「PTA」と「地域」、「地域」と「地域」の溝をなくしていく。
- ・これにより、支部同士の連携が可能となったら、仙北支所の駐車場で祭りを開催し、天筆コンクールや雪像コンクールなどのイベントを行う。
- ・「地域」と「農家」だけでなく、「地域」と「大企業」タニタ、タカヤナギなどを巻き込んで大きな祭りにし、最終的には参加した子どもたちのいい思い出となることで、その子どもたちが地域の後継者となり、また地域を盛り上げてくれる。

⑤グループ

- ・まずは小さい部落単位に、上沖田と下沖田をまとめていくことを考えた。
- ・新しいものではなく、昔やっていたものを復活させたい。そこで、十数年前にやっていた「盆踊り」と三十数年前にやっていた「運動会」を復活させ、子ども達に伝えていきたい。

- ・もう一つは、鍾馗様の復活で、50年ほど前にあったようで集落の入口に設置していて、お面については今も祈禱しているとのことから、わらなどを確保して復活させてみようという意見があった。

⑥グループ

- ・川前集落は、面積が狭く、総戸数が300～400戸と多い状況となっている。
- ・当集落は、昔からの住民と新しく分譲したところに他地域から入ってきている人がおり、文化も混在している。
- ・以上のことから現状では集落間の連携は難しい状況である。
- ・今後の課題として、現在の多種多様な文化を踏まえ、新たな集落文化を形成する必要にせまられている。
- ・そのためにも、まずは30代40代の若年層と、多種の産業にかかわり退職された方も移住してきていることからそこで交流の場をつくる必要がある。
- ・そうして融合した文化をつくった上で、他地域との交流事業ができればと思う。

【⑦～⑨のグループ】 コミュニティビジネス事業の提案

⑦グループ

- ・3集落（刈又、一ツ森、弥兵衛谷地）の強みについて考えた結果、3つの要素があった。
- ・一つ目の施設の活用としては、柵の湯、まがり家、歴史民俗資料館、餅の館が当地域にはあり、餅つきも行われていることから、施設案内とセットで人を呼び込むことができる。
- ・二つ目は、直売所を設置し、地域住民が栽培している古代米、アスパラガス、トルコキキョウ、米、漬物等を販売する。さらには農業体験の受入にもつなげられると考える。
- ・三つ目は、一ツ森公園を再整備し、アスレチックコースや東屋を作り、人が集う公園として復活させる。

⑧グループ

- ・「払田がおもしろい」というテーマで考えた。
- ・払田の山でぶどうを栽培し、加工から販売まで行う。
- ・また米どころなので、ドブクロの特区申請をして、基盤整備ができていない田んぼでの栽培を行う。さらにはそこで若い人に農業を体験してもらいたい事業も行いたい。

- ・ 払田柵のガイドンスの隣にある直売所を誰でも自由に活用できるようにして、野菜や加工品を農家と子どもたちが一緒になって数量限定で販売する。
- ・ 米どころ＝わらの文化が根ざしている地域でもあることから、わらを使った加工品の販売や、自然乾燥させた米の販売を行う。

⑨グループ

- ・ 払田柵の売店を活用したコミュニティビジネス案を考えた。
- ・ 柵真会と高齢者とが交流できる茶屋の運営。
- ・ 軽トラ市や飲食の提供もできる。
- ・ 人が集まる工夫として、払田柵ガイドンスにて払田地区の名所等に関する情報提供を行う。
- ・ 払田柵でのセグウェイのレンタルや気球上げなどのイベントを実施。
- ・ 最近営業を終了した払田スキー場の復活。
- ・ 払田柵跡や真山公園にて、有名なミュージシャンを呼んでフェスを開催する。
- ・ 払田柵であれば、プロジェクションマッピングも可能と考える。

10. 壇上者からの意見

■大山議員

- ・ がんばる集落応援事業、H28年度1500万円の事業であるが、国や県の補助金は一切なしの市単独事業である。本日の会を機に皆さんからどんどん活用いただき、さまざまな事業を展開してほしい。
- ・ 市内でこのような会を行い、住民の方々が集まって話し合っている地域はない。また、地域内の交流事業も非常に盛んに行われている。
- ・ 毎年多くの大学生が合宿で大仙市を訪れる。こういった方々にお祭りの案内を出すと、来てくれるはずである。若い学生と地域の交流、また子どもたちとの触れ合いなど可能性が広がると考える。
- ・ 自治会に加入していない地区の方々にも案内し、参加いただくことで理解を得られるのではないかと考える。
- ・ 各自治会における活動が大仙市の活性化につながる。

■本間議員

- ・人が動かなければ地域は動かないし、発展しないと考える。
- ・高齢者の方について、「老人」ではない呼び名をまちづくり課で考えるべきである。壮年なり、熟年というイメージで地域の方々にもっともっと活力を持ってさまざまな機会に参加していただけるような名称を考えるのも大事と考える。
- ・全国で初めて「老人」ではない呼び名をぜひ考えていただきたい。

■池田泰久氏

- ・全国で問題となっている少子高齢化・人口減少について、約2週間前に行われた商工会議所・商工会の会合で京都の講師が話していた内容を紹介する。
- ・息子、娘世代が田舎に帰ってくるためには、親が生き生きと仕事をし、生活している姿を見せないといけない、これが人口減対策につながるのとことであった。
- ・本日発表いただいた活動がまさにこれにつながると思うので、ぜひ実現させていただき、楽しい仙北地域を作り上げていけたらと考える。

■藤原集落支援員

- ・世代間交流の中で生活の知恵についての意見があったが、3.11の震災の時に若い世代は灯油を求めてガソリンスタンドに並んだりと生活するうえで必要なものを求めて走り回っていたが、高齢者夫婦の世帯では、薪ストーブを焚いて暖かくし、鍋でご飯を炊いたり、雪に埋めた野菜を使って食事をとっていたりときままな知恵を持っていた。
- ・常にこうした知恵を受け継げるような環境があり、大きな会合でなくても、子どもたちも含めながら話が聞ける場をつくることが大事である。
- ・幅広い世代をまとめるのは大変だとの意見があったが、以前旧増田町の狙半内地区と協和地域の集落で交流したことがあり、いろいろな事業が行われていたことに対して、どのようにやっているのかと聞いたところ、高齢者の方から「若い人達がすべて段取りしてくれるから、私たちは参加すればいいんだ。年寄りも参加しやすいようにしてくれるから、参加することを目標としている。」と話していた。
- ・まさにそのとおりで、主催側のみんなが参加しやすい配慮が大事だと感じた。
- ・また、50年前にあった鍾馗様を復活といった意見もあったが、まさに今がいいタイミングであり、集まるきっかけになると思うので、自分たちが動きやすい小さい単位から始めていくのもいいと思う。
- ・コミュニティビジネスのテーマの班では、セグウェイやプロジェクトマップの活用や、ミュージシャンの招致など若い世代の発想が非常に大事である。機会を作ってぜひ話し合いを進めていただければと思った。

■鈴木集落支援員

- ・世代間交流のグループで意見があった「女性、子ども」「若い人が集まりにくい」がキーワードと考える。
- ・秋田の女性は、前にでないし、自分の意見を言わないが、参加しやすい雰囲気を作って、子どもをうまく使って取り込むのも有効である。または男性が使われることもうまくいくコツかもしれない。
- ・集落をまわると、女性が活躍しているところはその集落がすごく元気である。
- ・集落間連携については、難しいように感じるが、祭りやブルーベリー摘み取りなど子どもをうまく使うことで事業がうまくいくと思う。

■老松副市長

- ・がんばる集落応援事業の目的として、集落の方々が顔を合わせて話し合うきっかけづくりというのが大きい。ここを大事にしていきたい。
- ・話し合いの結果、自主防災の設立、高齢者対策など各集落で必要な問題に必ず結びつくと思う。
- ・本事業は、私が審査委員長になっている審査会によって決定しているが、今まで不採用になった事業はない。申請される方々が一生懸命考えてきて、まちづくり課と相談して提出される事業であることから不採用になるものがない状況である。
- ・事業の予算はまだあるので、本日話し合われた内容についてぜひ申請いただいて実現させていただきたいと考えている。
- ・地域住民の方々が集まり、行政と一緒に地域について考える会を行っているのはここ仙北地域だけである。来年度はぜひ他地域にも先進事例として紹介し、全地域で行えるように広めていきたい。

■佐々木自治会連合会会長

- ・自治会連合会では、これまで他市の事例を何度か視察に行ったが、まさに「灯台下暗し」で地元でこんなにすばらしい事例があり、発表できるということを改めて感じた。
- ・また、短時間で話し合い、このような発表ができる地域というのはなかなかないと感じている。
- ・私自身、川前町内会の会長であるが、なかなか難しい状況である。その反省も踏まえお話をさせていただく。
- ・町内会では、これまで旅行、レクリエーション、運動会など行ってきた。また、なかなか参加がかなわない20代30代の若い衆の会も作って活動してもらったが、徐々に参加人数が少なくなり長続きしなかった。

- ・自治会を持続させていくには、年齢が10～15歳くらい離れた方へ引き継ぐことの難しさを問題として考えていかないといけない。
- ・自治会の取り組みについて、中だけでなく、外からの評価も重要と感じる。地域の中だけで満足するのでは長続きしない。外から素晴らしいことをやっているという評価をしてもらうことで地域住民が気づくことがある。
- ・次の世代につなげていく時、何の目的で行っていて、どういったところを目指しているかなどをはっきりさせる上で、外からの評価が非常に有効だと考える。
- ・各自治会の取り組みを他自治会の方々も見て、ほめてあげるようなことが事業を継続する上でのエネルギーになると考える。
- ・本日の内容を町内会へ持ち帰り、紹介するとともに、ぜひ他の自治会の事業に足を運んで、その内容についてほめてくるよう話したいと思う。

■吉田地域協議会会長

- ・本日のさまざまな話の原点には昔ながらの結（ゆい）があると思う。
- ・集落で当たり前だったコミュニケーションができなくなっている。
- ・若い方から「年配の方々とのコミュニケーションをとる場がない」、「中に入りづらい」との意見があり、PTA活動を軸に地域とつながる話があったが、非常に有意義であると感じた。
- ・本日の内容をもとに地域の共助と協働についてもう一度考えていただきたい。

■質問要望

- ・本日の内容をまとめた資料を参加者に配布してほしい。
- 対応する。

1 1. 添付資料

- ・当日資料（プログラム、講演資料）
- ・写真